

茗溪学園 中学校・高等学校

“Study Skills を身につけさせる教育” その5

教務部長 田代 淳一

茗溪学園が重視している Study Skills のうちのもう一つに討論方法があります。国内の小学校だけを卒業してきた大部分の生徒たちは、“きちんとした討論”を体験していません。しかし、「自分で考え行動できる国際人」を育てるためには不可欠な Skill です。そこで、今回は中学1年の、主に国語の授業から始まる討論 Skill の指導についてお話しします。

討論 Skill とは何か

よく小学校の学級会の話し合いで、子どもが議長になって始まりますが、大抵しっちゃんかめっちゃかになってしまい結局は勢力のある子や議長が押し切って決めてしまったり、逆に全然意見らしい意見が出ずに終わってしまうことがよくあります。子ども同士がきちんと話し合えるという次元は、実はかなり高度な次元であるというのが私たち茗溪の教員の認識です。小学校では当然無理。討論 Skill を習得する茗溪生でも、早くて中学3年生。実際は高校生になってからやっと実のある討論が自分達でできるようになります。年2回、中1から高3まで教師がいっさい口出しせずに6学年の全生徒が討論する生徒総会は、ある意味その成果と言えます。私たち専任教師はもう見慣れているので何とも思いませんが、非常勤講師で来ている他校出身の大学院生などはこの生徒総会を見学してそのレベルに絶句していました。

討論とディベートをよく混同している指導者がいます。しかしディベートと討論は本質的に違うものである、というのが本校の立場です。私たちも適宜ディベートの指導を組み込むことはありますが、かなり制限を加えて論じ合う“ゲーム”のディベートではなく、いかに真実にたどり着けるかに賭ける討論の方を重視します。

何のために討論 Skill を身につけるかという点、「自問自答できる人間になるため」です。物事を思考し検討し判断する際、まず自分の意見を持つ事が大事ですが、同時に別の視野があることを知り、自分の意見と比較検討し、深い結論に到達することが非常に大切です。その自問自答を、目に見える形で耳に聞こえる形で顕在化させ、集団思考を深めさせていく手法、それが本校の討論 Skill です。ですので、本校では決して討論に強い人間を育てようとしているわけではありません。寡黙でも構わない。むしろ自問自答をしっかり行え、他の視野や価値観を受け入れ検討した結果の、深く考えた意見を自分の中に構築できる人間を育てようとしています。そのためのトレーニングです。

2段階討論法

そのような高次なレベルには一朝一夕には到達できません。まして、討論など体験したことがない中学1年生の最初はやはり大変です。そこで、創立以来本校の国語科ではまず3・4人の小グループで討論し、次にグループ間討論に進む“2段階討論法”を実践しています。

この手法の鍵になるのが「学習リーダー」と呼ばれる、小グループでの司会進行役です。教師から討論課題が与えられて小グループ討論が始まる前に学習リーダーは教師から今日の授業の目的やポイントを示唆されます。小グループ討論が始まると、学習リーダーたちはその小グループの聞き役を果たします。勿論、生徒全員が自分独自の意見を持てるわけがありませんから、自説がない生徒の場合からも「どの意見に賛成か反対か、それはなぜか」は導き出すことはできます。特に発言力が弱い子にもそのいずれかの立場と論拠を持たせるように働きかけることのできる学習リーダーになれるように、学習リーダー自身もトレーニングされます。学習リーダーは小グループの意見を一つにまとめる義務を負いません。しかし二つまでにはまとめることが要求されます。一つにまとめることは難しくとも二つになら比較的容易です。

さて、学級には小グループが12班あります。各班から一つまたは二つの意見が出されます。この討論課題とは、たとえば「この文学作品の第○段落の○行めにある“赤い色の帽子”という文章は、“赤い色の”が無くても十分意味は通じるのになぜわざわざこういう表現を入れたのか。それはどこのどういう表現からそれがわかるか。」という具合です。特に中学1年生の最初は、とかく主観的な理由を挙げる生徒がいますが、努めて文章の中から客観的な根拠をみつけさせる訓練をします。そこで各班から「なぜか」「それは何ページの何行目の表現からわかるか」という班の結論が出されるわけです。

グループ間討議に入る際にいくつかルールを用意します。先ほどのように班内では全員が何かしら意見を持つ仕組みになってい